風土会　　会　報（2011年10月）No.33

♪　♪　♪　♪　♪　♪　♪　♪　♪　　文責　　柴田　悦子

第 33 回学習会を，平成 23 年 10 月 14 日（金）19：00 ～ 20：00 福岡市教育センターにて行いましたので報告いたします。

第 33 回目の内容
講師　重枝一郎先生（福岡市教育センター主任指導主事）
1　教科指導と生徒指導は表裏一体～これからの授業づくりの発想～
2　コミュニケーション力向上実習
「ぼくらはジョーズ（話し上手・聞き上手）」
３種類の体験活動

教科指導と生徒指導

1．両輪ではなく表裏一体

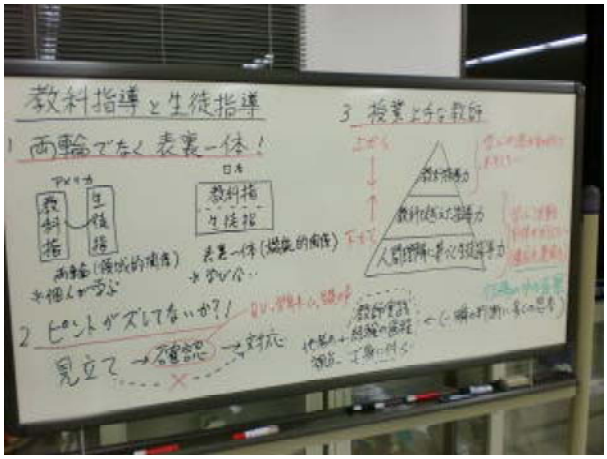
アメリカ　　日本

教科指導 ─ 生徒指導

教　科　指　導
生　徒　指　導

表裏一体（機能的関係）

両輪（領域的関係）
※個人が学ぶ　　※学び合い



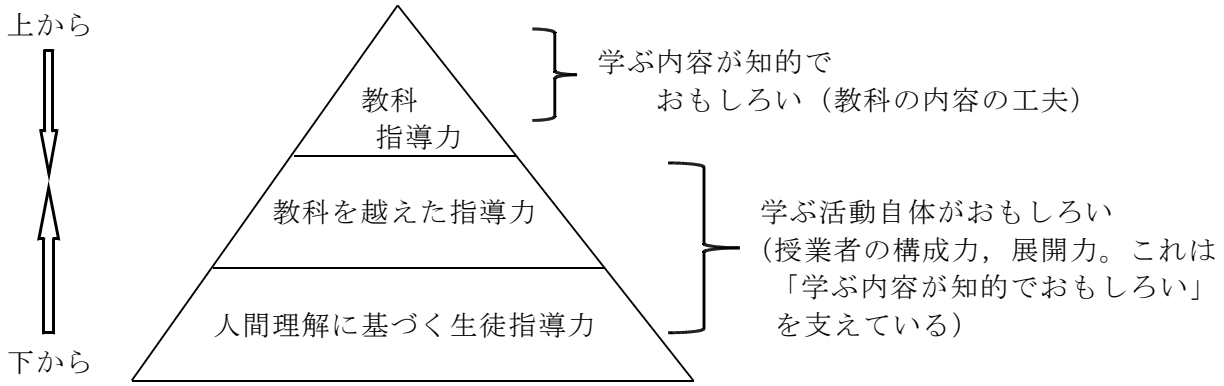
2．ピントがズレていないか？！

Q-U，学年チーム，生徒の声

見立て　→　確認　→　対応
↓　　↑
×

他者の視点　→　教師実践 経験の過程 で身につく　←　行為の中の省察（一瞬の判断に多くの思考）

３．授業上手な教師



「教育内容」を意識した「上からの技術」と「学習者」を強く意識した「下からの技術」をサンドイッチしていく。つまり，「学級集団の状態」を意識し，「心理学的技法」を意識する。

「行為の中の省察」
　＝即興的に授業を展開しながら，深い洞察でそのつど状況を把握していく力。

授業はライブ！授業中に何が問題なのかを見抜くこと，そして行動を瞬時に決める。これが「構成力」「展開力」である。この力は教育実践の過程で身に付ける。「一生教師でいることが幸せ」につながる。

４．授業の５つの構成力デザイン

①教師のリーダーシップデザイン
②集団の状況の目安のデザイン
③授業場面のデザイン
④授業進行のデザイン
⑤授業の流れのデザイン

５．授業の２つの展開力デザイン

①能動的
②対応的

６．教師の専門性

学び合わせる

解　説

◎　日本の教育システム

小学校では「教科指導」を中心に，中学校では「生徒指導」を中心に考えるような文化があります。しかし，日本の教育は，「教科指導」と「生徒指導」が「表裏一体」なのです。

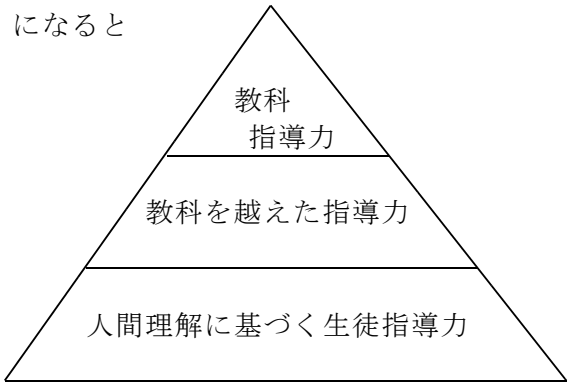
なぜなら，日本では「教科指導」「生徒指導」の両方を同じ先生がしているからです。教科担任制ではない小学校では，一日のすべての時間，同じ先生が指導しています。小学校の先生の意識は「教科指導」でも，同時に「生徒指導」も行っているのです。

欧米では，「教科指導」を学校の先生が，「生徒指導」をスクールカウンセラーが行います。これは，「教科指導」「生徒指導」を領域としてとらえており，「両輪」といえるでしょう。また，日本のような「学級」を単位とした集団教育ではなく，「個」での学びが中心です。大学のようなイメージです。

これに対して日本の教育は，「生徒指導」を基盤とした「教科指導」を行っています。学級を単位とした「学び合い」が，日本の教育の特徴です。だから，海外から日本の教育の視察に来ても，高く評価はされるものの，真似はできないといわれています。それは，根本的に教育のシステム自体が違うからです。

◎　教師の指導力

学級を単位として，「教科指導」「生徒指導」の両方を教師が行う日本では特に，教師に必要な力量は，右図のような「ピラミッド」になると思います。



◎　教師の指導力を高めるために「他者の視点」

指導力の高い先生は無意識にしていることですが，集団指導でも個別指導でも，まずは「見立て」をしてから「対応」しています。例えば，落ち着かない雰囲気であれば引き締める，停滞ムードであれば盛り上げる等です。

「勝負は一瞬」です。教師が子どもに対応する場合，瞬時に判断する場面は多々あります。その判断が適切で，深い指導ができるようになる「技」を磨くためには，「ピントがズレていないか」を省察することが大切です。その場合，「他者の視点」で確認するのです。

「他者の視点」には，客観的な調査法である「Q-U アンケート」や「学年チーム」でいろいろな先生の見立てを話し合うこと，子ども自身の声などがあります。これは，若い先生にとってもベテラン先生にとっても必要なことだと思います。

自分だけの思い込みや決めつけではなく，そこに「他者の視点」での確認が入れば，自信をもって踏み込んだ指導にチャレンジできるからです。

いつの時代でも，先生には「熱さ」が求められていると思います。子どもと先生の関係は，一生続くものです。その子にとって，どんな先生だったのか。それが本当の意味での，「教師の指導力」であり，そこにすべての答えがあるのかもしれません。

◎　授業上手な先生は「構成力」「展開力」がある

授業上手な先生の実感としては無意識でしていることを，多くの先生との「共有財産」にするためには，それを「言語化」する必要があります。

中学校の教師は教科担任制であり，教科の専門性がありますが，「授業上手」な先生は，道徳や学活の授業，学年集会での語り，係活動や清掃指導，行事の指導など，そのすべてが「うまい！」のです。例えば，重枝先生は中学校数学の先生ですが，道徳や学活，集会等でも，生徒を惹き付ける魅力的な授業をします。もし，英語の授業をしなければならなくなっても，同じことです。それは，「人間理解に基づく生徒指導力」があり，「教科を越えた指導力」もあるからです。それが，「構成力」「展開力」です。

◎　授業の５つの構成力デザイン

「構成力デザイン」とは，授業の枠組みを設定する力です。学級集団の状態に合わせて授業を工夫します。

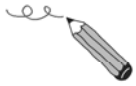
教師のリーダーシップには，微調整が大切です。集団の状況に応じて，「教示的」「説得的」「参加的」「委任的」を使い分けます。

集団の状況を把握する目安は，学習規律の定着状況や学習内容の広がり，深化，定着度，子ども同士の関係性等です。集団の成熟状況に応じて，子ども同士がかかわる際のルールの提示や，認め合い，相互支援をさせる場を工夫します。

授業場面は，「個別」「ペア」「グループ」「全体」を組み合わせてデザインします。

授業進行は，「教師主導」と「生徒主導」でデザインします。

授業の流れは，「導入→展開→まとめ」の流れの中で，意欲の喚起に必要な時間，集中が維持できる時間，気分をほぐす時間等をデザインします。その中で，「テンポよく短く」「じっくり長く」等を，効果的に使い分けます。



◎　授業の２つの展開力デザイン

「展開力デザイン」とは，授業中の教師と子どものやりとり，子ども同士のやりとりを通して，具体的に授業を展開させる力です。学級集団の状況に対応して，授業をどう進めていくかを工夫します。

「展開」は，**「能動的なこと」**と**「対応的なこと」**の両方でデザインします。

「能動的なこと」には，**「発問」「指示」「説明」「提示」「活動促進」**があります。

「発問」は，教室のテンションを左右します。そのテンションは，教師自身の声のボリュームやテンポでも調整されます。また，学習に向き合うきっかけとなる問いかけが，授業展開の大きな要因になります。効果的な「発問」の工夫が重要です。

「指示」は，子どもの意欲にバラツキがあるときには，簡潔にかみ砕いて行います。

「説明」は，子どもが落ち着いていない状況では，段階ごとに区切りながら行います。

「提示」は，意欲が低い状況であれば，一目でわかるような図や絵を用いて，短時間で集中できるような方法を選択します。

「活動促進」は，ルーティン化された行動を活用しながら，活動に巻き込んでいくのが効果的です。話し合い活動をさせる場合は，話し合いのルールの定着が大切です。そのために，教室空間の構成，特に机の配置に気を配ります。

「対応的なこと」には，**「発言の取り上げ」「賞賛」「注意」「空気づくり」「自己開示」**があります。

「発言の取り上げ」は，子どもに認められ感をもたせ，意欲を喚起します。また，授業内容の理解を促し，それを明確化します。

「賞賛」は，認められ感やルールの強化，活動の質を向上させるために，教師が意図的に行います。

「注意」は，予想される行動に対しては，事前に注意を促しておきます。その背景の思いや願いを含めた毅然とした態度が，逸脱行為を抑制します。「だいじょうぶ？」等と援助的に注意す

ることもあります。（ＰＭ理論のＰとＭの順番）
「空気づくり」では，教師主導でいいことはほめ，悪いことは注意します。ルール遵守をほめていないことが往々にしてありますが，ほめることで意欲付けをして，その空気を生み出すことも効果的です。教師のシンプルでブレない指導が，教育力のある空気をつくります。
「自己開示」は意図的に行います。ひとりの大人として，ハッキリとしたモデルになるようにします。子どもとの良好な関係のもと，自分について語ります。

◎　教師として一生幸せでいたいなら，「毎日がトレーニング」

教科指導力は，本を読んで個人で勉強することができます。しかし，「構成力」「展開力」を含めた下からの技術がないと，子どもに伝わりません。それでは，どうすれば下からの技術が身に付くのでしょうか。それは，「毎日がトレーニング」という意識で，少しでも自分の技を磨いていこうとする「職人意識」がポイントです。職人＝マイスターという意識で究めていくと，磨かれて輝く（スター＝☆）のです。
そのためには，「行為の中の省察」＝授業中に何が問題なのかを見抜いて瞬時に判断できる力量が必要です。一瞬の判断には多くの思考が伴います。それは，経験を積むことと，他者の視点を加味した気付きによって，得ることができます。
小学校では教室の壁を，中学校では教科の壁を取り払い，教師が自分の実践を「開いていく」ことが，教師として一生幸せでいれるかどうかのポイントといえるでしょう。

◎　授業＝部活動＝係活動＝・・・・・関連付ける力

指導力の高い教師は，教育活動全てを関連付けて考えるので，そのすべての指導力が高いのです。一本調子で指導するのではなく，集団の状態に応じて教師のリーダーシップを微調整しています。基本的には，最初は教師の強いリーダーシップが必要です。きちんと教え，しつけるのです。しかし，いつまでも教師が強いリーダーシップを発揮していると，集団は退行していきます。少しずつ生徒主導に移行し，3 学期は集大成の達成感を味わわせ，ほめて強化します。これは授業に限らず，部活の指導でも係活動の指導でも同じことです。
また，集団の状況を読み，どのレベルで取り組むことができるのかを見極め，その少し上をめざして活動させます。段階的に，質を高めていくのです。

◎　交流活動等の「活動」を入れるのが，「これからの授業づくりの発想」

交流活動では，感情交流も意識してさせるようにします。集団の状況や内容によって，ペアや 3 人組，６人組など，適切な人数をデザインします。みんなが意見を言い合えるような場をデザインします。
講義式の一斉授業では，子どもの満足度は低くなります。子どもは，授業に活動が入ることによって満足度が上がるのです。だから，体育や音楽好きの子どもが多いのです。理科ならば実験，家庭科なら調理実習が好きなのです。
しかし，活動量も，テンポよく短い方が良い場合，じっくり長い方が良い場合など，さまざまです。それをうまくデザインします。

◎　「発問」と「質問」は違う

「発問」は子どもの多様な考えを引き出します。例えば，中学校の数学の授業で，「１４」という答えを引き出したいときに，先生が「１０」と言い，子どもに「４」と答えさせるような場面は，笑い話のようですが，実際にあることです。そのような誘導的な問いかけは，もちろん「発問」ではありません。
また，問いかける声のボリュームやテンポは，場のテンションをつくります。「発問」の中身と同時に，「場」のテンションを調整するという両方をデザインします。

◎　生徒主導で話し合い活動

これからの授業づくりの発想に組み込んでいくこととして，「言語活動」は重要です。生徒主導で話合い活動をさせることも，「言語活動」です。その場合，ルーティン化させた動きを定着させておくと，限られた時間の中でスムーズに行うことができます。班の作り方，司会の仕方，話し合いのルール等をトレーニングしておきます。

また，班にする場合，机の配置も大切です。教室の限られたスペースでどのようにオーガナイズするのか。重枝先生の場合は，その発想をサッカーから学んだといいます。どこにコーンやゴールを置いて，ボールをいくつ使うのか等・・・。その工夫が練習の質を左右します。それは，吹奏楽や合唱でのパート練習やセクション練習，全体練習をオーガナイズすることでも一緒です。場や練習内容の工夫，ルーティン化させた練習メニューや動き等・・・・・授業でもイコールなのです。だから，これは部活指導，これは授業と閉じて考えるのではなく，すべてを関連させて考えていくと，教師の構成力が向上します。

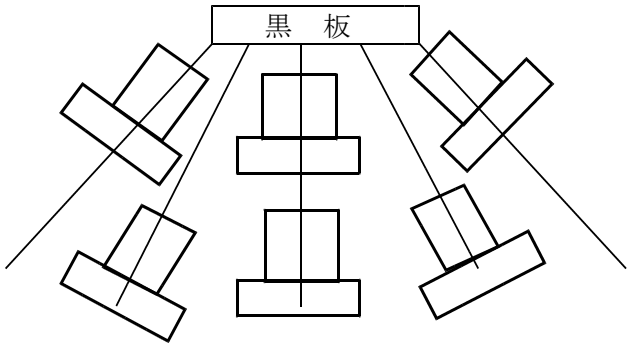
教室での机の配置についてですが，教師は実際に子どもの席に座って体感してみると，さまざまな気付きがあると思います。

例えば，６人班の場合（下図ア，イ）のように座ることをどう思いますか？

（ア）　　（イ）

話合いをする場合，班員全員がお互いの顔を見ることができるようにします。また，話合いの途中で教師が「黒板を見て」と指示を出すことがあります。その時には，黒板が見えるようにする必要があります。角度をつけると視野が広がります。このようなことが，授業の展開に影響します。細やかなことに配慮し，気配りができる教師が力量の高い教師といえます。

ちなみに，6 人班の場合は，（イ）にして，教室の中で放物線上に班をつくるとよいと思います。実際に子どもの席に座って，比べてみてください。



◎　見せかけの毅然とした態度は見抜かれる

「ＰＭ理論」の「Ｐ」は指導面，「Ｍ」は援助面です。教師には，その両方が必要です。細やかな気遣いの中に強い指導性をあわせもつ教師が理想的なのです。それは，「きびしさ」と「あたたかさ」をあわせもつこととともいえます。その 2 つは，相反するようですが，統合することができます。それを子どもは，本能的に感じとっています。子どもに迎合する教師を，子どもは尊敬しません。また，虚勢を張る教師も同じです。それは見抜かれます。

子どもの背景を知ったうえで，寄り添うだけではなく，子どもへの愛情からの毅然とした態度も時に必要です。それは子どもも受け入れます。そんな教師を子どもは「恩師」と呼ぶようになるのです。

◎　生徒が満足する授業の３つの要因

日本の教育システムの特徴は「学び合い」です。これをもっと教師は意識し，アピールしてもいいと思います。友だちと仲良く学び合えることで，授業への満足度は大きくなります。それを意識した授業づくりをデザインするのです。

また，快適な活動量と上達感を実感できる「評価」が入ると，満足度が高まります。子どもを集中させる工夫が必要です。一方的な講義形式の授業では，満足度が低くなります。

「意欲からの落ちこぼれは生まない」という発想です。

そのためには，「学級集団の状態」を意識した授業づくりをします。教師は，「教育内容」を意識した「上からの技術」と，「学習者」を強く意識した「下からの技術」を用いた授業をします。「下からの技術」には，「心理学技法」も含みます。

◎　「心理学技法」を取り入れるために

「心理学技法」を教師が取り入れるためには，それを教師自身が学ぶ必要があります。例えば，構成的エンカウンターやアサーショントレーニング等は，「心理学技法」を取り入れた手法です。

それらを授業に取り入れるために，教師自身が学び合うのです。この「風土会」も教師の学び合う場です。学ぶことで，「教師として一生楽しめる」ようになると思います。これからの教師に必要なことは，「学び合い」から生まれる「仲間」の支えです。

近年，病気休職や早期退職に追い込まれる教師の数が増加しています。急速に変化する社会情勢の中で，学校が担う役割も多様です。学校で，社会性を身に付けさせる教育が必要になっています。人間関係づくりやコミュニケーション能力，規範意識の向上等です。それらの教育を教師が効果的に行うために，また，そのような授業づくりを行うために，日常的な教師の「学び合い」が必要になってきていると思うのです。

◎　子どもの心を育てる

心の教育とは，複数の思考・感情・行動を学習させることです。この，「思考・感情・行動」の３つが３点セットになっているかどうかがポイントです。

思考を学習させるためには，教師が自分を語ることに加えて，仲間同士のシェアリング，つまり「感じたこと，疑問に思ったこと，学んだこと」を語り合うことやディスカッション，価値感の異なる人々と接する機会を提供すること等が有効です。

感情を学習させるためには，教師が感情表現することに加えて，同級生や異学年で同じ感情を共有する体験をもつこと，音楽や美術，体育や行事等で感情表出の体験をすること等が有効です。

ありがたいという感謝の気持ち，うれしい，楽しい，正しいことを貫こうとする正義感や勇気，恥ずかしい，申し訳ない，かわいそう，自信，自己肯定感等，多種多様な感情を自分自身で味わう必要があるのです。

行動を学習させるということは，行動の仕方を学ぶことです。例えば，いじめられている仲間を傍観している子どもは心の中で「かわいそう」（感情），「やめさせなければならない」（思考）と思っていても，行動できないことがあります。このような場合，どうすればよいのかという具体的な行動のとり方を学習するのです。

第１に，自分の気持ち（感情・思考）を人に伝える言動の学習です。心理学的技法では，「自己主張」「自己開示」といわれる反応のことです。

第２に，義理と人情（ギブ・アンド・テイク）（Win － Win）の行動様式の学習です。例えば，「おはよう」と声をかけられたら「おはよう」と言って返す。けんかを止めてくれた友だちがいじめられているときには，助ける等です。

第３に，自分が属している集団の行動様式（ルール，行事）に従う学習です。

これらの行動を学習させるために，教師がモデルを示したり，ロール・プレイで疑似体験させたり，ＳＳＴ等でトレーニングしたりするのです。

◎　生活規律の確立と人間関係づくり

「生活規律の確立」や「人間関係づくり」は，生徒指導や教科指導と関連付けて全教育課程で相互作用させるという考え方で，小中連携で取り組むと効果的です。

「ルール・マナー（学習規律）」と「リレーション（人間関係）」は，集団体験の中で同時に育てます。

生徒指導では，「いのちを守る（ゼロトレランス）」「いのちを輝かせる（受容・支援）」の両面で行います。それは，脅しや迎合，甘やかしではなく，「管理」と「受容」という発想です。

教科指導では，「授業規律の維持」と「自己指導力の育成」を両面で行います。教科指導は生徒指導の弱点であり，最大のチャンスともいえます。教科指導から始まる学級の荒れは防がなければなりません。教科指導を通して学級づくりを行うという発想だと，大きく前進していきます。

両面（表裏一体）という考え方で，関連付けて指導していくのです。

◎　中学校では教科の壁を越えて，授業を見合う

授業改善を推進するために，学校でテーマを決めて取り組むことは大切です。例えば「問題解決的な学習」を「学びの過程」にこだわって取り組む場合，大枠だけを確認しておきます。

学習過程		学習活動（○）と生徒の姿（☆）	
思考のエンジンをふかす	のりだし	➡ 授業規律の習慣化と課題の意識化 ○ゾーンに入る　☆集中した姿 ○学習課題・本時のゴール（めあて）をつかむ ☆疑問や驚きをもつ　☆願いやあこがれをもつ ○何ができるようになればよいのかわかる ☆できそうだという意欲	学意欲の向上
	よむ	➡ 課題解決に必要な情報の取り出し ○文章・情報・グラフ・データ・図表・記号・心情を読む，観察する，見る，感じとる，聞く ☆解決の見通しをもつ　☆解決の方法を考える ☆学習計画をたてる	言語活動の機能を生かす
思考のエンジンで走る	自分で考える	➡ 自分の考えをもってやってみる ○「自分から」「自分で」やってみる ☆既習事項を生かす　☆調べる　☆試してみる	
	伝え合い練り合い	➡ 考えを比べ，深める・広げる ○自分の考えを伝える，友だちの考えを聞く ☆考えの共通点，相違点に気付く ☆自他の考えを検討し，共有する ☆自分の考えを見直し，修正する	
思考のエンジンが着く	振り返り活動	➡ 学習の振り返りと変容の自覚 ○めあてについて振り返り，学んだことをまとめる ☆自分の達成度，理解度を判断する ☆学んだことを生かそうとする ☆自分に必要な学習を選択する（復習・予習・活用・発展）	成就感・振り返り

◎　導入と振り返り

授業の導入で必ずすることは，構えをつくりゾーンに入れる（集中させる）ことです。その大枠は決めておきますが，仕方は，教師それぞれの持ち味でよいのです。例えば，「黙想」であったり，教師の話術であったり，写真や絵に注目させたり・・・。

体育や音楽ではルーティン化させた活動で構えをつくり，ゾーンに入れることが多いようです。例えば，号令走や準備運動，発声練習や音楽鑑賞等。同じような考え方で，国語であれば漢字練習や音読，数学であれば計算問題トレーニング，英語であれば単語練習や英語の歌等を，ルーティン化させることもできると思います。

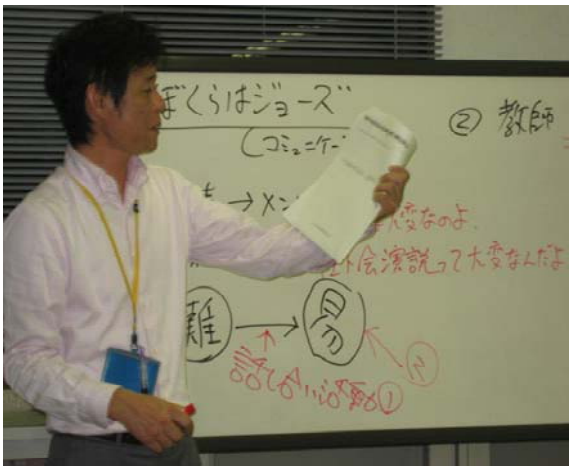
また，「伝え合い，練り合う」活動を必ず入れることや，振り返りを必ず入れることを決めておきます。全ての授業，全教科で行うのです。この大枠をルーティン化させます。

振り返りでは子どもに，学ぶ喜びである成就感や達成感を味わわせます。「何を学びましたか？」という問いに対して，子どもから「意味」と「感情」の両方を引き出すと，意欲からの落ちこぼれを生まなくなります。それが，学力の落ちこぼれを生まないことにつながるのです。

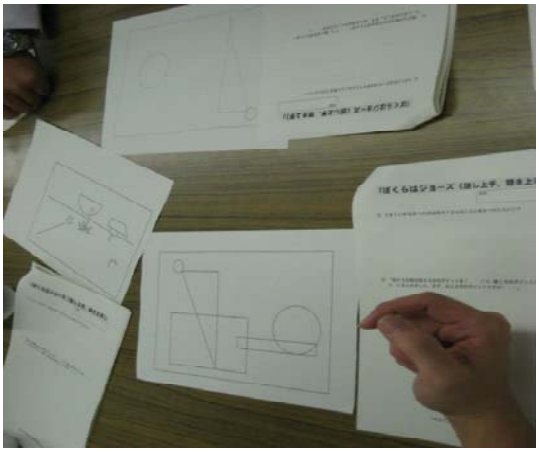
「意味」は，学習内容に関することですが，「感情」であれば，「〇〇さんに教えてもらって嬉しかったです」「〇〇さんの発表がわかりやすくて，自分も理解できました」という，お互いを認め合う場になります。これは学級に，支持的風土をつくります。

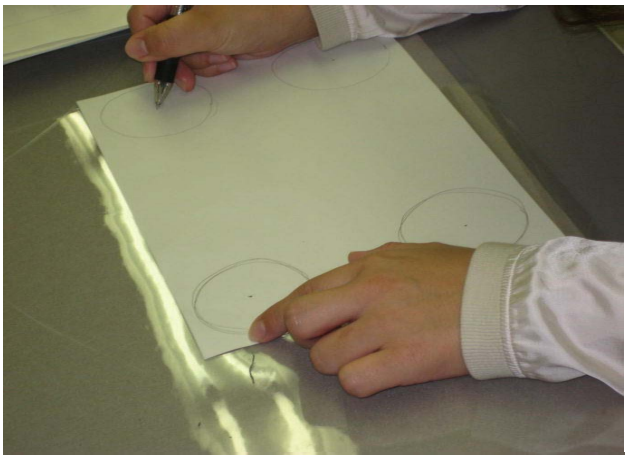
「集団づくり」は，特別な場で行うことではありません。日々の授業で行うことができるのです。これを，小中連携で全員の教師で行えば，教育効果が高くなります。相互作用が生まれます。ポイントは，大枠だけ決めて，それぞれの教師が自分の持ち味で実践することです。

エクササイズの体験活動　　**『ぼくらはジョーズ（話し上手・聞き上手）』**



今回は，同じ内容のエクササイズを 3 種類体験しました。教師が「構成」「展開」を工夫すれば，多様な学び合いができることを実感してもらうためです。授業の「構成」「展開」を考えるときに一番大切なことは，相手意識を強くもつことです。「相手に伝わるように」を意識して，「構成」「展開」を工夫することの重要性を実感できました。（会報 11 号，22 号でも，同エクササイズを紹介しています。参照してください）





☆　今回のキーワード　☆

○教科指導と生徒指導は両輪ではなく「表裏一体」
○見立て　→　確認（「他者の視点」＋「一瞬の判断に多くの思考」）→　対応
○授業上手な教師：「人間理解に基づく生徒指導力」を基盤にした「教科を越えた指導力」がある。
つまり「学習者」を強く意識した「下からの技術」と，「教育内容」を意識した「上からの技術」（教科指導力）をサンドイッチできる教師
○授業の「５つの構成力デザイン」と「２つの展開力デザイン」
○意欲からの落ちこぼれは生まない　　○行為の中の省察

♪学習会に参加された先生方の感想♪　（参加人数　２６名）

・「実感を伴った理解」とよく言われますが，「風土会」で自分が体験したことで，その重要性を強く感じました。理論的な面と実践的な面のどちらも同時に学ぶことができ，とても勉強になりました。とにかく，授業が上手になりたい！！と思い，これからのやる気につながりました。次回もまた，学ばせていただきたいと思います。

・中学 3 年生に数学を教えていますが，最近，生徒の学ぶ活気・元気のようなものがなくなりつつありました。受験だ，入試だと追いつめている自分にも気付きました。授業の中に生徒の活動を取り入れ，生徒同士の感情交流を取り入れれば，生き返るのではないかと，ヒントを頂きました。「意欲からの落ちこぼれをつくらない」いい勉強になりました。

（→先生にも「やる気・活気・元気」が必要です！それがあれば，「授業が上手になりたい！！」という意欲がわいてきます）

・模造紙のつい立てをして相手に絵を伝える活動は，以前，宇宙飛行士のトレーニングとして取り入れられているのをテレビで見ました。その時は，「確かに長時間狭い空間で過ごし，お互いの命を預け合う仲間同士だから，そのようなスキルも必要だなあ」と感じただけでしたが，今日実際に自分が体験し，重枝先生の話を聞くことで，まさに「学級（授業）における担任と子どもの関係と一緒だ！」と実感しました。たいへん勉強になりました。重枝先生のサッカー部顧問としての話も，ぜひ聞きたいです。

・合唱コンクールに向けて取り組んでいますが，私のクラスでは，伝えようとする機会や，「伝えてもいいんだ」と生徒たちが心から思えるような風土づくりが不十分だったので，リーダーたちがずっと苦戦しています。先生やリーダーなど，前に立つ立場の人もそうですが，結局は集団全体が，「伝えることの大切さ」や「伝えることの難しさ」を，身をもって感じ，日々の生活の中で実践していくことが必要だと思いました。生徒たちが，いろいろな気持ちを味わう機会をつくり，一緒にクラスをつくっていきたいと思います。

（→日々の生活の中で，また，授業や学級経営，風土づくりにも関連させながら，「伝え合う」ことを大切にしたいです）

・経験年数は気がついたら重ねてきたけれど，？？？となることが多い毎日でしたので，今回参加させていただき，これで良かったんだと安心する部分と，もう一度やり直さないといけないなと考えさせられる部分と，両方ありました。本日学んだことを，もう一度復習しながら，毎日の実践に生かしたいと思います。エクササイズも，初めて会った先生方と楽しくできました。これも魅力ですね。

・PM 理論のお話で，教師によってアプローチが違うという部分で「なるほど」と納得しました。自分の今後の指導に役立てていきたいです。また，展開力，構成力については，耳の痛い部分もありましたが，どのような工夫が今後，自分の授業でできるだろうかと考えさせられました。

（→毎日の実践に生かす！どのような工夫ができるだろうかと考え実践する！魅力的な先生はみんな，実践家です）